

### 神話を失った世代

私の世代は、神話を失った世代であるといえるのかもしれない。

私の世代は、戦前を生きた両親が、それぞれに戦後を生きなければならぬ中に、日本人の生き方とか、焼夷弾が降った記憶とか、同級生が学徒出陣した負い目とか、様々に新しい時代の中で、両親が出会い、家族を持ちたいと願い、大家族に見守られつつ戦後が常態になった社会の中で生まれた世代である。

折しも、日本全体が高度経済成長に向かう時代となり、教育の重要性とか、高校進学率とか、大学進学率とか、ノーベル物理学賞とか、大きな神話の中で生活を形作ってこれた世代である。

そして、「家族の会話」、「親子のつながり」、「成長への信頼」、「ものづくりのプライド」、「企業の終身雇用」、「大学進学の大難関」、「司法試験制度」、「キャリア官僚への尊敬」、「コミュニティの安逸」、様々な神話が、一つ一つ崩れていった。今は、親の介護を自分で行うこととなっている。介護の手立ては充実したが、実際の洗濯や食事作りは誰も助けてはくれない。

大きな契機は、バブル崩壊の後の、オーム真理教の教祖逮捕並びに様々な企ての発覚と、阪神淡路大震災の平成7年1995年だろう。

図らずも、私は平成8年に磐城高校に赴任した。1学級40人10クラスとなる大きな節目である。定員が450名から400名になったのである。

その後、2001年のニューヨークの事故の後、磐城高校は男女共学化となった。土曜日も休業となり1日60分6時間授業で授業時間を確保し、1学年9クラスから8クラスになる時代を超えてきた。今は50分7時間授業となり、2011年の東日本大震災と原子力発電所事故が追い打ちをかけ、少子化の波は大きなうねりとなり、昨年より1学年7クラスとなる。

それでも守らねばならないことはたくさんある。不易と流行があったとしても、学び舎の場所は永遠である。建物は朽ちるので建て替えなければならない。同窓会館や高月講習会も変遷する予兆はある。生徒指導においてもやんちゃな生徒はほとんどいなくなった。併せて野武士のような強い精神の持ち主も淘汰されている。

「世界史の村上」や「化学の上遠野」という講堂がいっぱいになった課外授業も思い出である。

それでもどこまでも突き詰めようとする探求心や聡明な判断力や豊かな表現力は変えてはいけない。まさしく変わってもいない。生徒の能力は依然として目を見張るほど高い。

このことは神話ではない。必然であり現実である。いつまでも変わらない現実の前に授業力を高めるのも礼儀である。

毎日の変わらない現実を継続することが、神話を失う世代の失うことのない仕事である。大切なのは次世代の人を育成することである。たくさんの人の力を結集させることである。最後の年を迎えてこのことを改めて心に誓い、毎日を送ろうと決意しているところである。皆さん頑張りましょう。

